



## 大賞 [高校生の部]

戦争や貧困に苦しむ海外の同世代の子どもたちを救いたいという、筆者のこだわりや強い思い、課題意識の掘り下げ、提案の具体性・実効性が高い評価につながりました。

# さくらんぼネットワークの構築

——世界を救い、日本を変える

神戸朝鮮高級学校2年

韓 大鏞 はん てよん

私の創りたい未来社会は、世界をリードする元気で活力に満ちた日本である。

日本の最も深刻な問題は超高齢社会化であり、少子化である。就業年齢に当たる人口の減少は経済発展を妨げるだけではない。いつの時代でも若者たちが新しい文化を創造し、よりよい社会を創るために身を挺して戦ってきた。若者たちが生き生きと活躍できる社会は、高齢者も幸せに暮らせる社会である。しかし、日本の若者の数を今すぐ増加させることは不可能であり、手品のように出生率を高めることは難しいであろう。

私の提案は「さくらんぼネットワーク」の構築である。これは13歳から17歳、日本の学齢でいうと中高生にあたる若者たちを世界中から日本に呼び、勉強してもらおうというものだ。

文部科学省は2008年に、2020年を目途に30万人の留学生受け入れを目指すとしている<sup>1)</sup>。留学生というのは、おおむね18歳以上を指し、彼らは日本で高等教育を受けることを目的としている。

私は、ここで新しい発想を提言したい。それは世界の13歳から17歳の10代半ばの若者たちに、日本で教育を受けてもらおうというものだ。日本は少子化による若者の数の減少で悩んでいる。しかし、世界に目を向けると、貧しさや戦乱で、学校にも通えない子供たちが数多く存在する。今日の命が保障されない社会で、明日の食事の心配をしなくてはならない子供たちを、日本が救おうというのが第一の目的である。日本国憲法の前文には、「われらは平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」と明記されている。私はこのように素晴らしい憲法を持っている日本人が羨ましい。

今朝の新聞でも、パレスチナのガザで何の罪もない子供たち

が命を落としていると報道されている。アジアやアフリカでは多くの子どもたちが重労働を強いられている。今こそ日本が「国際社会において名誉ある地位」を占める時であろう。69年間、平和を守りぬいてきた日本であるからこそできるのが、この「さくらんぼ計画」である。

現在、日本には「さくらネットワーク」というものがある。これは国際交流基金が海外日本語教育拠点の整備拡充を実現するため、世界各国の中核的な日本語教育機関を構成メンバーとしたものであり、2011年8月現在、43カ国116拠点で展開している<sup>2)</sup>。現在、日本の国際協力NGOは400以上あるといわれ、世界100カ国以上で活躍しているという。そのほとんどの組織で子どもたちへの教育支援が行われている。このNGOやNPOを「さくらんぼネットワーク」で繋いでいくのだ。現地に学校を建て、給食を配り、学用品を与えるというサポートは必須である。しかし、13歳ぐらいになると学校を終え、そのまま社会に出るしかないという子供たちが圧倒的多数である。読み書きを教えることは、子供たちの生きる力の源である。しかし、そこで教育支援を終えてしまうのは、あまりにも惜しい。

まず、各NGOやNPOの協力を得て、世界各地から日本で学ぶ希望者を募る。いろいろな国で、さまざまな事情を抱えた子供たちを選別することは、非常に難しいことである。まず、命の危機から救うこと。そして、残された家族にも納得してもらい、新しい未来を創るためにさくらんぼたちを日本に呼ぶ。さくらんぼたちの労働による収入が生活に不可欠であるという場合は少なくないであろう。さくらんぼたちは、日本でも学びながら簡単な労働(アルバイト)に従事する。その報酬の一部を家族に送金できるようにすれば、残された家族には大きな助けとなる。

各地で集められたさくらんぼたちを、日本ではボランティアで募った家庭で受け入れる。そして中学校と高校の各学年に1クラスずつ「さくらんぼ組」を設け、ここでは1年間で日本語を習

得することを目標とした授業を行う。今、日本全国の公立の中学や高校では、空き教室が毎年のように増加している。生徒数の減少で悩んでいる学校を優先して、さくらんぼたちを学ばせるようにすることが望ましい。13歳から17歳までの若者たちがひとクラス増えただけでも、学校はもちろん、その地域の雰囲気も大きく変わることは間違いないであろう。

学校では、1年間の日本語教育を柱とした授業を中心に、学校行事や部活動にも日本人の生徒と全く同じように参加させていく。このぐらいの年齢になると、日本人生徒や外国人生徒の考え方の中にも、言われのない先入観や偏見などがあることが考えられる。まだその芽が小さいうちに摘むには、同じ学校で共に学び、歌い、汗を流すことが最も効果的だ。私自身、在日コリアン3世として、たくさんの日本の友人と親しくなれたのは、バスケットボールのおかげだと確信している。知らないことが不安を生み、不安が偏見を育てるのだ。そして、さくらんぼたちは2年目から日本人生徒と同じクラスで学ぶようにする。

さくらんぼたちと仲良くなった日本人の子どもたちは、家庭に戻り、家族に彼らのことを伝えるであろう。ホームステイ先の大人たちも、彼らと共に生活することで貴重なものを得ることができる。寂しかった夕食時にも笑いが起こり、誰もいなかった部屋にも灯りがともる。さくらんぼたちは、故国と日本に2つの家族ができることになる。そして、中学と高校の学区が中心となり、若者がいなかった町にも賑わいが戻る。人手不足で悩んでいた店舗には、さくらんぼたちがアルバイトとして元気に勤めることにより、活気が生まれるであろう。部員不足で試合ができないような部活も、さくらんぼたちの入部により、どんどん試合に出場することができるようになる。17歳になり、高校卒業を控えたさくらんぼたちは、故郷に帰るか、日本で就職するか、進学するかを選べるようになる。故郷に戻ったさくらんぼたちには、日本で学んだ日本語の力を地元で発揮し、次の新しいさくらんぼたちが日本に渡るまでのサポーターとして活動してもらおう。日本に残る場合には、彼らが自由に働けるような資格を与える。日本語が自由に操れるようになった10代の若者たちの増加は、日本経済を飛躍的に発展させることが予想される。日本の社会に出たさくらんぼたちは、会社や工場、商店で、そして農園や漁場で、逞しく働くことであろう。さくらんぼたちの最も大きな特徴は、彼らが日本語を話せるということである。

ことばが正しく通じてこそ、お互いの考えや気持ちが理解でき、お互いを思いやれるのである。さくらんぼたちは、日本語ができるだけではない。同じ年代の日本人の子どもたちと、同じ空間で、同じ時間を過ごした「ともだち」であり「なかま」でもある。10代の多感な時期を共に過ごした経験は何物にも代えがたい連帯感を生む。これは、この後、何年、何十年経っても、深まりこそすれ決してなくなることはない貴重な宝物となる。そして、

さくらんぼたちと共に育った日本人の若者たちは、それ以前の世代とは、明らかに違ったグローバルな視野を持った日本人として社会を担っていくであろう。

#### 参考文献

- 1) 文部科学省ホームページ「留学生30万人計画」骨子の策定について
- 2) 文部科学省「留学生30万人計画の進捗状況について」平成23年8月現在

#### [受賞者インタビュー]

**考えを論文に  
まとめることができたこと、  
受賞できたことが嬉しい**



#### ——コンテストに応募したきっかけは？

学校の掲示版に貼り出されていた募集ポスターを見て、担当の先生にチャレンジしてみたいと伝えました。

#### ——論文を書き上げるまでにどのくらいの時間がかかりましたか？

夏休みに、バスケ部の部活の前後の時間を使って、うんうん唸りながら書きました。

#### ——この論文を書いたことで良かったことは？

今まで「こうなればいいのに」と頭の中で思っていたことを小論文という形にできたことが、何よりの喜びです。大きな賞をいただき、いつも迷惑ばかりかけている母に少しは恩返しができたかなと思います。

#### ——今、どんなことをしている時間が楽しいですか？

今まで以上に本を読むことが好きになりました。今まで興味がなかった政治や経済をテーマにした本も読むようになりました。表彰式で審査委員の方々がお話しされていた、「人生が変わるかもしれない」コンテストだという言葉が耳から離れません。